

● シリーズ 私の見た日本 Vol.174

大阪中崎町長屋レトロ

黄 理琦 (コウ リキ)

中国福建省出身。2012年来日、2015年大阪YMCA国際専門学校卒業、同年関西学院大学入学。2017年～同大学 総合政策学部 都市政策学科 八木研究室在籍



日本に留学して6年を過ごした私は、日本の街並みのなかにある「レトロ」な雰囲気がとても重要であると強く感じています。私の故郷は中国の福建省の福州市です。近年、経済発展に伴って、中国の都市の様子が大きく変わっていますが、中国の都市化の行方を考えるうえで、これまで見過ごされてきた重要な観点があります。それは、都市の果たす役割や機能を歴史的視点から見直すことです。福州市もその一つで、私が育ってきたこの町では日々高層ビルが建ち、昔からの伝統的な住宅や商店街などが消えていきました。

留学している6年間の間に日本のまちや建物をたくさん見てきました。中国と日本のまちで大きな違いを感じたのは日本のまちのレトロ感でした。日本では日々開発が進み、高層ビルが敷地いっぱい建てられ、ビルという名の単一な壁が次々と都市を覆っていきます。しかし、そのなかに「長屋」という魅力的な存在があります。

長屋とは、細長い一つの建物の内部を壁で仕切り、いくつかの住まいにしたものです。建物内でお互いの住宅を行き来できるようにってはならず、入り口が複数あるつくりと

なっています。江戸時代の庶民の住まいの多くは長屋でした。それには、江戸の人口と面積が関係しています。当時、政治を取り仕切っていたのは武士であったことから、江戸の土地の約70%は武士が使用し、約15%は神社仏閣、残りの15%に人口の約半数を占める町人が暮らしていました。この住宅問題の解決策が長屋だったのです。しかし、時代の変化に伴い、長屋の数は減少し、現在も残っている長屋はわずかです。

ここで私が例としてあげるのは大阪府にある中崎町・豊崎エリアの長屋です。この場所は私が最も好きで、いくどとなく足を運んだ場所です。中崎町・豊崎エリアは、第二次世界大戦中の大阪大空襲によって周辺が焼け野原となったなかで、戦災を免れた貴重なエリアです。およそ300坪の敷地の中央を路地が南北に貫き、路地の西側には本宅(主屋・一戸建て)が建っています。主屋の北、東、南には、長屋建ての6棟20戸の貸家があります。建物群の間にある幅3mの路地はそのまま残され、植栽が路地を彩り、街並みが形成されています。主屋と長屋はどちらも明治末から大正末にかけて建築されたものであ

り、木造軸組構造の建物で、庭と一体となった居住空間を持ち、長屋は四畳半の寸法を基準とした空間となっています。歩いていると、長屋や古民家が残る独特な佇まい(図1)、路地まではみ出て干された洗濯物や軒先に置かれた鉢植えなど、昭和時代にタイムスリップしたようなレトロな場所です。

しかし、近年老朽化した建物や空き家は解体されて更地になり、新しい建物や駐車場に姿が変わっています。100年前の市民の日常生活を色濃く残した長屋を取り壊すのはあまりにも惜しいです。私は中崎町・豊崎エリアの特徴を活かしたまちづくりとして、古い街並みと新しい建物が共存するまちづくりが必要であると思います。中崎町・豊崎エリアは1990年代の終わり頃から再び街並みが評価され、カフェや雑貨店等の店舗が空き家に入居するようになりました。このような住宅から店舗(図2)へのコンバージョンはここ10年ほどの間に急増し、これらを目当てにした来街者も若者を中心に増加しており、まちがブランド化しています。また、都心部からのアクセスも容易なため観光地化も急速に進行しています。

このように、現在の中崎町・豊崎エリアでは、近年長屋をコンバージョンしてカフェや雑貨店、ギャラリーを開く人たちが増えています。その理由としては「大阪や梅田の駅から近い」「家賃が安い」「古い木造の空間が好き」などさまざまですが、最も重要なことはこのエリアに店を構えたいと思わせるまちが持つ雰囲気や魅力に惹かれたということです。中崎町・豊崎エリアでは、特定の団体や個人が長屋のコンバージョンを推進したり、橋渡しをしたりしているわけではありません。いろいろな人が中崎町の雰囲気や住んでいる人たちに共感を覚え、それぞれの意志で長屋に移り住み、ゆっくりとした時間が流れるこのまちのなかで自分のライフスタイルを表現する場として昔ながらの町家や店舗を利用した個性派ショップが数多く誕生し、どのお店も個性的な佇まいでありながらも古い街並みを壊すことなく、まるでこれまでであったかのように馴染んでいます。

私は中崎町のカフェの先駆けとして人気がある「Salon de AManTo 天人(サロン・ド・アマント)」(図3)の仕掛け人で、パフォーマーのJUNさんにヒアリングを行いました。この

カフェは、築130年の古民家再生の過程を公開する「空き家再生パフォーマンス」で、延べ1100人のボランティアを集めて話題を呼びました。外観は植物で覆われ店名すら読み取ることができず、カフェとは思えない感じでした(図3)。入り口の引き戸を開け一歩店内に入ると、まるでタイムスリップしたかのような昔の民家の雰囲気があります(図4)。築135年という古民家カフェの店内は、靴を脱いで座れる座敷席があったり、はしごを使って上げられるロフトスペースがあったりと、手づくり感があふれる温かみと自由でくつろげる雰囲気は、まるで子どもの頃の秘密基地を思わせます。ヒアリングを行った日も近隣の住民や外国人観光客で賑わっていました。

中崎町の長屋がコンバージョンで成功した理由はいくつかあります。一つは店舗だけのまちにならなかったことだと思います。中崎町は半径200mほどの狭いエリアに雑貨店やカフェが密集していますが、その店舗の合間を縫うように民家が存在しています。カフェの看板の隣に洗濯物が干してあったり、カフェの常連が住民であったりと、店と住宅がうまく共存しています。店舗だけのまちには夜間

の出入りが少なく防犯上の不安があるなどの問題がありますが、中崎町には商業のほかに「人々の暮らし」があります。もう一つ成功の理由をあげるならば、昭和の名残がある中崎町の雰囲気が好きな人が自主的に行ったコンバージョンやリノベーションが続いたことでしょう。もともとこの地域に暮らす住人や築100年を超える建物を尊重しながら、自分たちのやりたいことを積極的に実現しています。

中国がこれから経済発展に伴って、古くなった建物を高層ビルなどに建替えることは当然なことですが、ある程度伝統的な建築物を残すべきだと思います。建築はまちの記憶装置であり、人生の軌跡で自己のアイデンティティを確認する場所なのですから。

参考文献

藤田 忍：「大阪長屋を活かすまちづくり」公益財団法人都市活力研究所(2014.4.4)

前田陽子、瀬田史彦：「中崎地区における新しい店舗と既存コミュニティの関係に関する一考察」公益社団法人日本都市計画学会 都市計画論文集(2012.10)



図1 中崎町・豊崎エリア周辺



図2 中崎町・豊崎エリアコンバージョン事例



図3 Salon de AManTo 天人 外観



図4 Salon de AManTo 天人 内観